

11月23日 聖霊降臨後最終主日 ルカ 23:33～43 「自分を救って見ろ」

日本ルーテル教団関東地区招聘牧師 北川逸英

今日 11 節の短い聖書のみことばで、三度くり返して、「自分を救って見ろ」という言葉が、十字架上の主に向かって投げつけられます。

ひどい目に遭い悲しみに沈み、苦しんでいる人の心を挫く一番残酷な言葉が、「自分自身を救え」という命令です。両手両足を木に打ち付けられ、完全に自由を奪われ、まったく無抵抗な人に「自分で自分を救え」などと、言い放つ事が出来ると、皆さんはきっと驚かれた事でしょう。

しかし私は知っています。無力な者に対して、暴力集団は驚くほど残酷になります。学校や職場でのいじめはまさにこれです。同じ苦しみを私は、小・中・高と体験しました。暴力は必ず増大します。高校時代は体育の授業の後で、校庭の鉄柱に縛られて、水を掛けられて服を破られていました。

しかし毎週金曜日必ず、購買部で体操着を購入する私を、親も教師も不思議には思わなかったのです。友だちもだれも助けてくれませんでした。それは私が笑っていたからです。いくら「やめろ」と言っても、暴力を奮う者たちは手を止めません。むしろ興奮して暴力はエスカレートします。それならばもう私は、ただ声を上げて笑うしかありませんでした。それは外から見れば、悪ふざけをしているだけに見えたかも知れません。しかし暴力を受ける被害者の心は死んでいます。その辛さは誰にも理解されません。救いを求める事が出来ない時、心は動きを止めてしまいます。

そうすると暴力を奮う者たちは退屈します。いくら暴力を加えても反応が鈍くなるからです。そうすると次の被害者を見つけ出します。そして暴力で支配した者同士を、互いに戦わせようとします。悲しい事に、被害者もまた、自分の受けた怒りと恥を、自分より弱い者にぶつけて救いを得ようとします。

これは地獄です。「自分を救って見ろ」は、地獄で悪魔が被害者に向かって投げつける、言葉の刃です。

しかし、今日わたしたちが聞いたみことばの中で、「自分を救って見ろ」と罵られたお方は、その地獄のただ中に、いっしょに降りて来てくださった主イエスさまご自身です。主は本当に「自分を救う」ことのできる神の子であったのに、その力をふるってはいくさいませんでした。むしろ、動けない者、声を奪われた者、心を殺されてしまった者たちと、同じところまで降りて来られたのです。

十字架の主に向かって議員たちは叫びました。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」それは今の私たちにも突き刺さる言葉です。「自分で何とかしなければ価値がない」「自分さえ守ればそれでいい」。弱さを恥じて隠し、他人の痛みよりも、自分の面子や自分の利益をまず選ぶ心は、誰の内にも必ず潜んでいます。いじめる側に回ったことがなくても、見て見ぬふりをしてしまったこと、心の中で同じ言葉をつぶやいたことは、なかったでしょうか。

イエスさまに対し、直接暴力を奮った兵士たちも、さらに侮辱して言います。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」そしてこの情景を描く絵画で、イエスさまの頭上には、「INRI」とラテン語で書かれた札が掲げられています。

Iesus	イエス
Nazareus	ナザレの
Rex	王
Iudaeorum	ユダヤ人の

さらには三回目として、同じように残酷な十字架刑を受けて、イエスさまの隣りにいる犯罪者が、主に向かって罵ります。

「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」

これこそ追い詰められた人間が、最も愚かな過ちを犯す、本当に悲しい姿です。

だが同じく、主の隣りに並んだ十字架の上で、一人の人がこう告白します。「我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ」(23:41)。この短い一言は、「自分を救え」という呪いの言葉とは正反対です。彼は自分の罪を認めます。次にイエスさまが「何も悪いことをしていない」と感じ取ります。その上で彼はイエスさまにお願いします。これは祈りであり、対話です。

「主よあなたが御国においでになるときに、私を思い出してください」(23:42)。

この「思い出してください」という祈りは、小さな、しかし決定的な希望の灯です。自分では自分を救えない。そのことを認めた上で、「それでもあなたは、わたしを見捨てないお方だ」と信頼して、身をゆだねる希望です。

イエスさまは、その小さな祈りに応えてくださいます。

「はっきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」(23:43)。ここに、「自分を救え」という呪いの鎖を断ち切る、神さまの側からの宣言があります。イエスさまはこの罪人との対話によって救いを与えられました。

わたしたちは、聖霊降臨後最終主日に、このみことばの前に立たされています。教

会の暦の一年が終わろうとするこの日に、主はわたしたちに、「自分はどう生きて来たのか」「だれを傷つけ、だれの涙を見過ごしてきたのか」を、静かに振り返るよう招いておられます。いじめの現場で笑ってごまかすしかなかった弱さも、見て見ぬふりをした臆病さも、自分の正しさに固執して他人を裁いた心も、すべて主の前に差し出すようにと招いておられます。

相手のあるがままを見つめて、自分のすべてを開示したときに、対話の場が生まれます。たとえそこが地獄のような戦場でも、心を開いた人が集まる所に、イエス・キリストはともにあって、聖霊のお守りが与えられます。特別な時空が Sanctuary（聖域）として開かれて、神の栄光が現れます。

自分の罪を思い返すことは、つらく、恥ずかしい作業です。できることなら目をそらしたくなります。しかし、主イエスさまの十字架の前でだけ、わたしたちはほんとうに自分を見つめることができます。なぜなら、その十字架の上で、「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」と祈ってくださったお方が、わたしたちの罪と恥をすでに背負ってくださったからです。罪を認めることは、罰を待つためではなく、赦しにあずかるためです。

やがて教会は、待降節を迎えます。暗さが増し、日が短くなるこの季節に、わたしたちは「光である主を待つ民」として立ちます。自分の力で自分を救い出そうとあがき続ける生き方から離れて、「主よ、あなたが御国の権威をもって来られる時、わたしを思い出してください」と祈る民へと造り変えられていきます。自分の弱さを隠さず、罪を言い逃れせずに主の前に差し出すとき、そこにこそ聖霊が新しい希望を灯してくださいます。

「自分を救って見ろ」と迫る声は、これからも、社会の中で、また自分の心の中で響くでしょう。「もっと頑張れ」「もっとできるはずだ」「弱い者は切り捨てられて当然だ」と迫る声に、わたしたちはしばしば負けそうになります。しかし、そのただ中で、十字架の主は、静かにこう語っておられます。「あなたが自分を救えないときにこそ、わたしがあなたを救う」。この約束こそ、わたしたちの希望です。

さらに自分の罪に目覚めた私たちは、主の赦しの恵みに預かり、希望に生きるように招かれています。罪人であっても、神の義によって自由とされます。その時にこそ

「わたしたちは、自分のしたことの報いを受けているから当然だ」
という「処罰」から解き放たれて、人間的な生活への「回復」がはじまります。これが私たちの救い主、イエス・キリストが与えられる道であり、神と隣人を愛する関係のはじまりだと信じます。

聖霊降臨後最終主日から待降節へと向かうこの時、わたしたちがそれぞれに、自分の罪と傷を主の前に差し出し、十字架の赦しと復活の希望をあらためて受け取ることができますように。わたしたちが、「自分を救え」という声ではなく、「あなたは、わたしと共にいる」という主の声に耳を澄ませ、新しい一年へと歩み出していくことができますように祈ります。